

書評 山里純一著『沖縄の魔除けとまじないーフーフダ(符札)の研究ー』

高 島 英 之

一

このたび山里純一氏は、沖縄で現在も使われ続けている呪符木簡(フーフダ||符札・祈禱札)について、体系的研究をはじめて纏めた一書を上梓された。本書では、沖縄の人々の間で今も生き続ける符札の種類・地域毎の分布調査と地域色の析出・形態及び内容に則した分類・取付パターンの分類・発行元の社寺の分布と発行元毎の類型化など、あらゆる角度から符札そのものについての基礎的な分析を加えられるとともに、フーフダ(符札)と密接に関わる各種の呪物やまじないと魔除けの風習や伝承についても究明されている。まさに沖縄の呪符木簡に関する総合的な研究が展開されている画期的な書物であると言える。

災いを避ける願いを込めて、家の門口や屋敷或いは墓の四隅などに取り付けられたフーフダ(符札・祈禱札)は、沖縄の人々にとつては大変馴染の深いものであろうが、実はそれらが、古代以来わが

国の各地で連綿と使われ続けてきた呪符木簡の系譜に連なるものであることを知る人は、本土はおろか地元でも少ない。こうした沖縄の民衆の間で行なわれてきた信仰や呪術については、地元研究者にはあまりにも身近なものであるが故に、また本土の研究者にはその存在が知られていないが故に、これまで全く研究の対象とされることがなかった。山里氏が呪術資料としてのフーフダ(符札)に着目されたのは、氏が数少ない沖縄在住の日本古代史研究者の一人であり、彼地で今も使用され続けているフーフダ(符札)と、本土各地から出土する古代から近世までの呪符木簡との関連性にいち早く気付かれたからである。

二

本書の構成は次の通りである。

序 呪符研究小史と本書の構成
第一章 沖縄のフーフダ(符札)

- はじめに
 - 一 沖縄の「ムンヌキムン」
 - 二 沖縄のフーフダの実態
 - 三 沖縄の呪符の諸相
 - 四 文献史料に見る沖縄の呪符
 - 五 フーフダの源流と受容の背景
 - 六 フーフダの始期と契機
 - おわりに
- 第二章 八重山博物館所蔵のまじない資料
- はじめに
 - 一 方災除けのまじない
 - 二 「まじない紙」
 - おわりに
- 第三章 佐喜真興英収集のまじない資料
- はじめに
 - 一 呪言
 - 二 呪符
 - 三 「日取帳」と「時双紙」
 - おわりに
- 第四章 暮らしの中のまじない
- 一 幼児の夜泣きとまじない

- 二 くしゃみの呪文「クスクエー」
- 三 地震除けの呪文「キョウツカ」
- 四 夜の口笛

(一)

序では、これまでのわが国における呪符及びまじないの研究史が簡潔に纏められ、本書の構成が述べられている。

第一章は、本書の主題でもある沖縄のフーフダ（符札）について総合的な検討を加えている。なお、本章は一九九三年二月に行われた本会第一五回研究会における研究発表及び本誌第一六号所収「沖縄の呪符木簡について」（一九九四年）を大幅に補強・改稿したものである。

一節ではまずフーフダ（符札）そのものの検討に入る前に、沖縄で使用されている各種の魔除けの呪物「ムンヌキムン」（『物除き物』について具体例を列記し概観する。フーフダ（符札）も「ムンヌキムン」の一形態であるから、呪物全体の中のフーフダ（符札）の位置づけを把握することの必要性は言うまでもないが、本節があるが故に、読者はフーフダ（符札）とその他呪物との相互関係を容易に理解できるので、極めて有益である。本土で出土する古代以来の呪符木簡も、本来はそれのみで機能するものばかりではなく、おそらくは他の祭祀遺物と相互に補完しあっていた可能性が高い。呪符木簡の出土例の意味を考える上でも、呪物全体のなかにフーフ

ダ(符札)を位置づけて考えていこうとする著者の姿勢は首肯すべきであろう。

二節からは本題のフーフダ(符札)そのものについての検討に入る。本節では、頒布箇所・形態・種類・取付契機と時期・目的(願意)・取付方法・取付場所・分布などについて、詳細に類例をあげながら検証する。著者の丹念なフィールドワークと詳細を極めた資料収集の成果がここに集約されていると言っても過言ではない。

三節では前節でみた家屋敷に関わるフーフダ(符札)以外のものとして、宮古・八重山の地に特有な墓中符と墓の祈禱札、さらに棟札や石敢当や各種石製呪符などについて隈無く例示し、それらが一般的なフーフダ(符札)と密接に関わる点を示す。四節では、前節までにみえてきたフーフダ(符札)をはじめ各種呪術資料が、琉球関係史料に如何なる形で現れているかを検証し、フーフダ(符札)の起源や系譜・使用形態を探ろうとする。出土遺物や民俗資料の起源や変遷、用途・機能・使用形態などを解明するにあたり、文献史料を検証することが極めて有効な手法であることは今更申すまでもない。かつて古代木簡の用途と機能・使用形態を史料から跡づけられた画期的研究として東野治之氏の「奈良平安時代の文献に現われた木簡」(奈良国立文化財研究所『研究論集』Ⅱ 一九七四年、のち同氏著『正倉院文書と木簡の研究』一九七七年 塙書房 再録)があり、この業績が後の木簡研究に裨益した点は計り知れないが、本節は、沖縄

呪符木簡研究の分野において、この東野氏の研究に比肩すべき業績と位置づけられよう。

五・六節では第一章の結論が述べられている。著者は沖縄のフーフダ(符札)について次のように結論づけられた。

①沖縄への呪符の本格的な伝来は一七世紀以降であり、それ以前から沖縄社会で呪物が多用されていたことを背景に定着する。

②フーフダ(符札)は、沖縄本来の呪物を用いた固有の習俗に、本土の古代以来の呪符木簡が融合して生み出されたものである。

③確実に遡れるのは明治期までであり、王国時代から存在した可能性は高いが、初源自体はそれほど古くはないようである。

④初源期には一部王族の家屋敷で使われるにとどまった。

⑤その後、明治中期以降民衆の間に急速に広まっていったが、その普及には主として王府からの禄を失い、新たな収入の途を開発せざるを得なかった僧侶達の活動によるところが大きかった。

著者の詳細な資料収集から導き出された緻密な資料分析の到達点がこの集約されている。

(二)

第二章では、沖縄県石垣市立八重山博物館所蔵の呪符資料二例に

ついて検討されている。前章のフーフダ（符札）とは若干趣を異にする資料を論じたものだが、言わば前章の補論であり、著者の広範な資・史料収集の中から見出された成果である。

一節では、縦二四・一cm、横三〇・七cmの杉板に墨書された「金神方違の守」について、二節では「倪姓家譜小宗」に添付された「まじない紙」について検討を加えている。これまでは意味不明ということでも長らく死蔵されてきた資料であり、今回、著者の資料探訪によって初めてその意味が解明、公表されたものである。共に近代のものようだが、特に一節で採り上げられた資料は広義の呪符木簡の範疇に入るものと言え、沖繩における呪符文化の多面的な広がりを示すものとして注目できる。本章はまた、著者のフィールドワークが、これまで死蔵あるいは性格不明であったりして見過されてきた沖繩の資・史料に光を当てた点においても多大な成果をあげたということを示していよう。

(三)

第三章では、佐喜真興英が収集したまじない関係資料について論ずる。本章も前章と同じく著者の資料収集に伴って新たに見出された史料の紹介である。佐喜真興英は『女人政治考』『シマの話』『南島説話』『霊の島々』などの著書及び十数編の論文を有する沖繩の民族学・民俗学研究者で、特に『女人政治考』で耶馬台国の女王卑弥呼と琉球王国の聞得大君との類似を指摘し、女王と男王との

二重統治権の存在を説いたことはよく知られている通りである。本章では、著者の勤務する琉球大学に架蔵されていた未発表の手稿「琉球研究」から呪符関係資料を抽出し、紹介する。

一節では佐喜真興英が古老から聞き取りし採録した呪言を、二節では呪符を、三節では一七二八年に弾圧・廃止された占者「トキ（時）」が用いていた呪術のテキストである「時双紙」及び、これまではそれから書写されたと言われてきた「日取帳」について述べる。

著者は検討の結果、「日取帳」とするものすべてが「時双紙」からの引き写しではなく他の要素もつけ加えられている可能性が高いこと、また「時双紙」には本来呪符に関する記述はなく、トキが呪符を用いた確証もないことなどを指摘する。通説の誤りを正したことや、沖繩以外では知られることの少ない呪符研究や収集例を広く紹介されたこと、地元沖繩でも知られることが少ない未発表の手稿を紹介し、史料の位置づけをされた点など、まことに重要な業績と言える。

(四)

第四章は沖繩の人々の暮らしの中で伝えられたまじない・呪文・俗信について類例をあげながら平易に説く。

一節では幼児の夜泣きに関わるまじないについて、二節では沖繩の人々がくしゃみをしたときに唱える呪文「クスキュー」について、

三節では同じく沖縄の人々が地震除けに唱える呪文「キョウツカ」について、四節では夜の口笛を忌む風習について述べる。いずれも元々地元紙に掲載されたエッセイを基にしているせいか、内容的にも地元の人々に馴染み深いテーマを題材にしており、文章も平易で一般の読者にも読みやすい内容に仕上がっている。沖縄以外の読者には、沖縄独自の習俗と本土の類似する習俗との対比や、更に類似するものの中の細異などの点が興味深く感じられるだろう。

本章のような今も生き続けるまじないや俗信に目を向けることも、生活史としての呪符研究の方向性を示したものとして注目できる。

三

さて、本書の内容を、章を追って簡単に紹介してきたが、本書を紐解く人は、まず誰しも、著者の広く丹念なフィールドワークの成果に驚かされるであろう。著者はフーフダ（符札）や各種ムンヌキムンを追求め、沖縄本島はもとより、離島を含む沖縄県内すべての地域を悉皆的に調査された。私も著者の現地調査に数度同行したが、著者の詳細を極めた調査と飽くなき資料収集ぶりには、心底、圧倒される思いであった。

著者は、そうした丹念なフィールドワークと文献渉猟・民俗採訪の成果を基に、本土の呪術資料やフーフダ（符札）以外の沖縄の呪

術資料・風習・伝承などと関連づけながら、それらの種類や実態、源流や受容の契機から背景までを体系的に論じている。古代以来の呪符研究の分野に新たな視点を開拓した前人未踏の画期的研究と言えるだろう。また、これまでの琉球史研究の分野では政治・経済史や制度史など王国の上部構造論が主流で、こうした民衆レベルの史・資料に本格的に取り組んだ研究は非常に少なかった。そのような意味においては、琉球民衆史研究の分野に新地平をもたらした先駆的な労作と位置づけることもできる。

なお、敢えて若干のコメントを付するとすれば、まず、第一に本土の呪術史・資料との比較検討が今少し欲しかったということである。各種呪符の出典や起源については詳細に論じられているが、それらの多くは本土のまじない書にも見えるものである。本土の呪符と全く同じものなのか、沖縄では一部が変質しているのか、全くの沖縄独自の展開であるのか、そのあたりの比較検討がもう少しあれば良かったのではないだろうか。

例えば宮古・八重山地方でみられる墓の祈禱札は、本土では皆無であるばかりではなく沖縄でも宮古・八重山地方に特有なものである。また同じ墓関係の呪符でも、墓の中に入れる墓中符は沖縄各地で見られる。墓中符は明らかに道教的であり、地理的にも近く、古くから交流が頻繁であった中国南部や台湾などから伝搬したと容易に想像が付くのに対し、墓の祈禱札は仏教系で、中国での類例もな

い。また、本土の棟札に相当する「紫微變駕」も、一部の文言に本土と共通する部分があるというものの、全般的に見れば沖縄独自と言って良い。また、フーフダ（符札）が本土の呪符木簡の系譜に連なるものであることは再三述べてきた通りであり、特に門や入り口の左右に取り付けるものの文言は、本土のまじない書や出土した呪符木簡にみえる文言とほぼ共通しているが、屋敷の四隅に取り付けられる四天王の名号を記したものは、本土でも中国・朝鮮半島でも類例がない。明らかに沖縄で独自の変容を遂げているのである。

こうした沖縄の各種呪符が、仮に本土起源であればそれが沖縄で変質したことの意味、すなわち沖縄の人々の如何なる要請によって如何に変容したのかということ、沖縄独自の展開であればその理由や背景は何なのか、また沖縄の中でも特定の地域にのみ見られることの意味、などの点についても、もう少し突っ込んだ検討が欲しかったと思うのは私だけではあるまい。

また、現在も使われ続けているフーフダ（符札）と本土出土の古代以来の呪符木簡とは、地理的にも時間的にも格差が大過ぎて、比較すること自体、一見無意味と思われるかもしれない。しかしながらそれらの資料を比較検討することによって、沖縄社会ではいままなお現役のフーフダ（符札）の淵源が解明できるわけであり、且つまた、本土出土の呪符木簡研究の側から見れば、古代以来の呪符木簡の行き着いた先を民俗事例として確認できることになる。このよ

うな形で呪符木簡研究は、これまで誰しも予想できなかったような新展開であろう。まさに本書によってその先鞭が付けられたわけであるから、欲を申せばもう一步踏み込んで、本土出土の呪符木簡と沖縄で現役のフーフダ（符札）の相互検討についての著者なりの見解を伺いたかった。

今年一月末、那覇港間近の遺跡で一五・六世紀頃のものと思われる荷札木簡二点の出土が報じられた（本誌二一五頁参照）。たまたまその翌日に、呪符の調査のため、著者の依頼で沖縄を訪れた私は、幸運にも発表直後の沖縄初出土木簡を実見させていただいた。これは荷札であり、呪符木簡ではないが、本土の中世木簡と共通する特徴を有しており、今後は各種の木簡が沖縄県内各地で見られる可能性が出てきたわけで、あるいは初源期のフーフダ（符札）の出土も期待できるかもしれない。本書は、わが国の呪符木簡研究・沖縄の呪符研究・琉球民衆史研究の分野に新たな展開をもたらしたばかりでなく、沖縄における本格的な木簡調査研究史の緒を飾ることにもなったわけである。今後のこの分野における著者の益々の活躍に期待したい。

（一九九七年二月、第一書房刊、四六判、二八三頁、本体三〇〇〇円）